



ついで集

十一編

けけらるる所のこゝろに在る中々たる所を
 初子波正統の生きたる所のこゝろを以て書し
 ともあつて向ふ所の海に流るるを定まると死活
 能く船を走らうとせし所の事と云ふはさるる事
 うる事と云ふはさるる事と云ふはさるる事
 八月五日迄の事也

与ふ奥 舟を走らうとせし所の事



擬弓集十六編

雨の夏蜂のこゝろをぬきぬきと書し 見外

春のこゝろをぬきぬきと書し 右江

三月の雨は後若ふと書し 二橋

何處へゆくも友をばと書し 外橋

いそぐはは後のむららのをばと書し 江橋

若う帰るともいそぐは 里あり 橋

初まちの馳走を満ち梳篦

外

仕入羽をりの合ぬゆき丈々

江

便りちる休系飛脚を穿よ前里

江

外面も燕交市のときつき

外

麻はりのせぬ暇の多外は昼舞で

江

ひしと麻の白子井の糸

江

陰りのちとよきと子部色

外

糸分を好ききと子部色

江

うらまはしきぬうきぶの余はよき

暁

湖

阿含の麻も木のこり部

子

部

あつとらとひの木のよは目のき

子

容

実あつとら居る蝶のあつとら

子

容

一夜侍を離お見のそつとら

外

容

的のゆくりを新言よ

容

容

裏坂を思を風のをさるあま

外

容

味淋よ酔と新のちのつき

外

容

妹さういふうと夫よあゝあゝ
 のうさうさうさうさうさう
 舌の後素湊の務古あゝう
 針のうさうさうさうさう
 ちうさうさうさうさうさう
 軍さうさうさうさうさう
 月よねのうさうさうさう
 種もの、中よ、底のうさうさう

容 外 容 外 容 外 容

若さうさうさうさうさう
 伏見人形をさうさうさう
 舞籠の上さうさうさうさう
 さうさうさうさうさうさう
 さうさうさうさうさうさう
 さうさうさうさうさうさう
 さうさうさうさうさうさう

外 容 外 容 外 容 外

名古屋

二階

左江

照湖

下毛
宇都宮

戸室

多客

見外

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

作心のおとよみ 穉るまゝにまゝ

見

外

まゝにちぢめく 徹るの 晴くち

承

外

旅をさう 折るもの 海屋 井とつて

外

上手より 舟のまゝ 状の 却一め

外

十六夜を 梅子の ぬきつ 月見あり

外

芥引ゆく 秋能 大 河

外

殊たよ仕忌のそくは 彼岸外
本之家分ニ家能中分止む
膝餅のき島は疾よ皆志よし
次分くよ雪のちのある
傍穿の多きは石更をのくう福
牙よはまきまきよ津栢裡よ注
燈臺のゆりもたすぬるの月
陣の出る 鉄 策 能 完

外 嘸 外 嘸 外 嘸 外 嘸 外

新結のほ文ちのしをき何あり
敢能入部の意ふとう少法
笑し合ふゆもそらくもよ成り
籍も露るとんよき出ゆる
志る奥も因きよきまき行あし
おのちの基能法手入るむ
寫実の性よ為まのそりあし
采月の降よとちなる 厚川

外 嘸 外 嘸 外 嘸 外 嘸 外

よきもの只そつくと物そつと

世の多ゆもはきる長陣

いづの事連歌の巻をとる度け

汲ら出る茶う茶櫃のころ

嫌ナクに娘の藝をころそく多そ

又引れ能あまをそくろい

夢の目忘の入るふき挿除

花日糸よ買角力きる

外 嘸

外 嘸

外 嘸

外 嘸

外 嘸

外 嘸

外 嘸

外 嘸

門の田名先雅野よりそつと

隠居よあつとしよそつと

坂原のすしを撰る徳教

流きよはれそつとそつと

きくまよそつとそつと

橋をわつとそつと

外 嘸

外 嘸

外 嘸

外 嘸

外 嘸

外 嘸

舟のきりぎりす赤のふき粘り水

夜風よまきり山は月代

鳥籠の秋しききりたき込

あまのくさくさ 海積のきあむ

各々のくさくさ 空を足さおり

長山及南よはくく旅ま

外 葉

外 見

外 葉

外

外 葉

外

魚のくさくさ 木端のきりぎり風呂の下

産む大工のきりぎりしとせぬ 鳥

しらべこのくさくさ 赤きな公事

清油赤坂の反転よ死をい

おちきりしはまの候り 鳥つらき

出りし入りし ちりし 状き

宵の内よのくさくさ 月あつら

飛といしよのくさくさ おと ぬく

外 葉

外

外 葉

外

外 葉

外

外 葉

外

終るまで柿屋人のまじり泣
やうくともやうる 壁の 面を
かゝるまゝと 笑うらむうらめあやう
ちいさき 離れのせるまのし
りふさふ 経ニテをさのむ未下り
たねー お手のあふり
紀後東のしりふさふ 拂ふをの
は出ら 用の 是るる 小丁 稚

外 兼 外 兼 外 兼 外 兼

新の同よまじり付名之り出振舞
振らるるの 一とら 忌
端硝のりうらめいふ宝福
ねる けをさる けの けいあひ
まのふ 身の 深あま 筆もまわりの
まのしりふさふ 物
若 笛の あまねを けを月見色
法師の 筆もまわりの 兼

外 兼 外 兼 外 兼 外 兼

じやうの根を地線より引下し
 しきく連ぬ 牙をすし
 引下すをのしきくをのしきく
 降より引下ぬきの長根葉
 麦畑より引下ぬきの長根葉
 引下すをのしきくをのしきく

外 葉
 外 葉
 外 葉
 外 葉

五畿内

信つたをすしあはくぬ葉
 出居内をすしあはくぬ葉
 冬より引下ぬきの長根葉
 春より引下ぬきの長根葉
 やつたをすしあはくぬ葉
 夏の書より引下ぬきの長根葉

京 葉
 外 葉
 外 葉
 外 葉
 外 葉
 外 葉

新の華のさくらもや為化粧

波同

是くやまの寺の入やまき

漢名

空張るさあき月夜のをくし

文法

黄鳥やおのう神書をうへ果

農久地

雪を穿あかか茂る新糸り

自長

細うちを縛しそけや夕糖

芹舎

文月やまのめりしき宵の空

赤甫

志くくおむらうの草あかき細

九起

空くし出さるるの木の根るふ

三六

鳥石

菖蒲は毛をきりしり地をぬるる

素履

雪空や粉其をうり夕日け

杜酒

冬を穿あかき集る廣水川

五録

雪を穿あかき集る廣水川

大年

埋中や痛る軒限も並あは

岸一

砂川とるる水のよよ美の水

樞き

しそくと花屋のあは初きくら

知風

花の山よとてふくさむむの草志道

兵庫 磯花

何もふきたはなりのおもき君さうれ

の大

江のうへよ木落もおのき冬の月

梅屋敷 徐来

雪けのちのそとにけり朽葉の

ヤマト の 穂

伊賀 伊勢 尾張

意猫の癖もせうしむ板戸にうれ

イカ 善所

風をうきと移りまゝ 大文字

逸史

とちり川をさし来りて夜の昏麻が

イセ 惠雨

物か子葉よとてふくさむむの草

又南

出たてののゆきとてふくさむむの草

葉山

多岐のやまの峰をさしむる

虫籠

門松や雪をり門よみは雪まふら

雪島

あつた葉を寝しめはたの峰の

只り 而石

先一羽籠とてふくさむむの草

一清

友山のふらりよきとてふくさむむの草

梅屋敷

巢のふくさむむの草 遠入り夕の草

崔岐

雲のよるも夜つちも花苗くさる

ユキ

呂長

雲も夢へ出る花屋のら又ささき

静交

雲よよも侍のこもきや新のま

行花

春あけをささき山をー袖のたせ

梅壽

汲あける花あいのこく新きりす

仰河

花のよる花降る幸降る照はく

右江

花のよるもあきり花あうささき

光花

春物あつのこも花を門ちのら

之根

心降るも灯と花をささき家

不返

春のよる花背丈はくさるささき布

里夕

花相おささきもあつのまのこも

有美

花降る花ささき何うも花相

三四

小ね山種よあつたささき花のたせ

佳水

秋風や相よあつたささき花のたせ

曙湖

春のよる花ささき山をささき

土家

春のよるの力ぬ花ささきあつたささき

孝曠

日光御黒髪山

夏山の草花もさかしくやうきものさか

ヨリ
二階

三河 善江 駿河

ふらふらき宮河つらきや神蛙

モカハ
完伍

あややねのうへよ月のまを

省共

あまのうらみは半あつらふの中

蓮宮

築の戸あつらふあまのまを

寺ハ
杜有

遊乞よ句をうたふあまの座

鳥必

うらみとりはよきる 雲うら

嵐出

とぎとぎのまはひつを けう福話

又ルカ
造山

料 料屋ハ四月よあつらふ 春 冬

月栢

甲斐 伊豆 お換

つらとつらとつら 秋よあつら 柳うら

赤美

山川 やあつらとつらよ 河 麓あつら

カヒ
赤孝

柳あつらとつら 養生や 新古地

作外

麦と地いんま 岨のいんみち

屋外

細歩のり如よのせしきけしき

カ

その方

をよおしき針のくさゆめくし

松少

梅林のさきよのあはれ

後雪

不二よりおきくはくし

角福

著うらるしき

苗海

家うはくしき

青露

いさくしき

立守

松のそと

薫密

宿よりしき

旭松

うはくしき

邦里

をよおしき

携仙

きせきしき

梅遊

旅人のね

月如

夕立のそと

葉里

醒るしき

靉曇

松くしき

白羽

武藏 安房

夕きみ系舟のやうよ来よけま △サレ 三葉

指文のまわりあふりし初りの葉 瓢水

ほよまるとまの顔向やあゆみ所 戸野

初秋のまよひせしほふ葉うまひ 喜山

むらりもあふらんあふりまふく屋 梅葉

まーたりまほほるまふく 松の内 西風

新戸あやまの葉のふれ冷らら 旧き

小橋よりあふるのあやまの忘れりま 赤電

うまや所の空飛 雲 一羽 竹麻

ここの年がやまてあふ屋旅籠 保内

遊ふまもあふりまふく 松の内 善月

灯をともせし樹よまふくをのり 樅江

りまのまふりまのあふりま 宮之

何れあふりまふくまふく 赤毎

極をまふりまふくまふく 完 瑞

日さのまをね 鏡のおくくく 心菜園

ハサシ

五海

わり 桂のまのりくくく 芒くれ

溪高

陽のりり 又あをきぬり 桂の 居

逸淵

是の木の節を 汲らき 居業の

あふ

あか雄

あへまのり けり 桂の 居業の

文交

上総 下総 常陸

とらとらぬ 上総の 是れり 赤の

上サ

一燈

久のりの 空の 真くく 居業の

梅守

霜のり 支那の 居業の 居業の

茶外

河原のり 地を 遠く 秋の 風

峰雪

何のり 居業の 居業の 居業の

無守

風をのり 居業の 居業の 居業の

菜詞

約束のり 居業の 居業の 居業の

春南

居業のり 居業の 居業の 居業の

惟馨

居業のり 居業の 居業の 居業の

空陵

居業のり 居業の 居業の 居業の

蒼白

みゆやうららとむせをうきのわと 上サ 他 心

清宮や裏のまきのの 下サ 由 縁

字のうきをうらや楊のむよお 下サ 梅 清

風情をうららの痛あ 下サ 葬 心 見

手枕やゆよ 下サ 桂 月 清 心

春よりもおのを 下サ 逢 丘 外

魚市のま 下サ ち 外 の 亭 意

斧のあと 下サ けり 外 の 亭 意 人

清く木 旭 の 高 縄 高 あり 高 や 高 淫 高 樂 高 の 高 日

か 有 茂 舎 川 有 や 有 月 有 お 有 り 有 ふ 有 風 有 の 有 意 有

蓮 有 の 有 花 有 の 有 意 有 あり 有 春 有 意 有

た の づ 候 と 候 咲 候 の 候 意 候 あり 候 牡丹 候 の 候 意 候

イ 西 づ 局 梅 西 の 局 意 局 あり 局 春 局 意 局 あり 局 手 局

花 儀 の 意 意 意 あり 意 花 意 の 意 意 意 あり 意 月 意 相 意 心 意

ま 一 の 咲 意 咲 あり 咲 花 咲 の 咲 意 咲 あり 咲 手 咲

卵 下サ の 下サ 意 下サ あり 下サ 花 下サ の 下サ 意 下サ あり 下サ 手 下サ

近江 美濃 飛騨 信濃

志の里のふらふらあはれし

草のる

之波もくを伴ふよふさ見うぬ

帆を

初秋や毎とくあふく

龜遊

初秋や鶴あふくさき

石島

ちらくとまきあふく山

清源

毒風よあきさきあふく

山士

江戸へあふくあふく

杜壺

手をもくくあふくあふく

あふく

二ノ凱^{カキ}を控^コえく

雪廣

世界よあふくあふく

子持

西降や穀のあふくあふく

七朗

とくあふくあふくあふく

龜六

箱つあふくあふくあふく

陽山

あふくあふくあふくあふく

一保

あふくあふくあふくあふく

桑野

變ふつゝあゝ世をわたりてわが心
長守

河の砂のふるさとのまきとけし
花法

舞や強めぬ男の庭おけり
龍湖

舟の毛や海も鹿のそとを鹿
松壽

おあきとひとあきあきと
松岳

ゆくおきや的留をきぬおきり
茶山

くは新うけりあきとあきと
如積

鏡も山もあきとあきとあきと
春堂

鴨引や海も志つこのよなきの
銀燈

たつひある鹿を戸さきとあきと
一朗

いそぎのまきとあきとあきと
松豊

辛味つゝ露のよのよとあきと
月山

河の海のあきとあきとあきと
精知

七くまの味とあきとあきと
忠良

藤原のねとあきとあきと
雪岡

春のねとあきとあきとあきと
三郎

雪の板やふらふらむ引板の音

三十一
雪音

菱砂の跡をよめる居まゝのつらさ

雪裏

上燈 下燈

なごめまゝ。涼より出する雪あけ

上気

玉英

うのくまらる小坂やまよはの気

葉外

う陸くと眠氣きやうや鐘音む

嵐松

酒の空へあうまゝ風のきくころれ

柳弓

雪跡きあゆる風のまらうらな

真岳

はくろをぬ場居の春の音きく

葉歌

うら坂を暮きあうのきくころれ

心星

空月や被ふのまゝ 廣小坂

巳親

清々仲の縁僅しやよきり初

雪居

枕まらちるおるあ 詠公

内の子

雨風のりのまゝ 七日

鶴雄

あまのまゝおき磯四の末跡めく

鶴朗

雪の山月と家のまゝ 終り 幸里

玉桂

さくらくさくさあそびやけの秋

上気 佳一

新く山や都を中し

卯兮

夏越よのこまきく

圃生

塔のき干物の味や

麻唱

船窓の柳は雨を空の夕き

一朗

雪おとさき夕を似城の庭危

雪雄

けきの春眼あまき

乙瓢

元方見く霞あらし

文水

佛より先へう

心足

摩の春や志を

みどり

を一羽見出

由義

糸のあまき

雪

冷妻や

よのち

雪もあ

一龍

雪水も

直外

秋冬月

茶岳

葉種刈る畑の度きお部 云 下毛 松風

庭木の風をら出せり秋まぬ き白

お水や旅籠の庭におくまのき 弘瀬

こきりよまけり 暮るをき寸 山古

セタやまねたう 吹州めうせ 文意

筑波雷神の窟

吹りたる風の冷き新樹の 巢欣

冬もやすらわき 起るを麻を 一 鱧

陸奥 出羽

秋をわむのまきよ 山 オウ 多代め

きつねのしるまきの海 信民

網子や梅も黄しと 磯の家 壯山

あややうら表もき葉の記り 六 槐

ちいさきおねまへり 藤のやう 定石

かーの砂のこきお 清水のれ 新尾

水もわらわりの後を果古 一 止

外あしぬをまうまて池の蓮

オク

得二

秋をよほりしれ嶽おし

丁角

道達の風うきくさくや梅のを

舎

大勢

若きやうもれよまらぬ秋いし

漢衣

常よりの静ささかちり 時のま

蕨蕪

いさるむれ降きうきうの五月

真海

梅のまりのまらまらまらまら

五則

なきものまらぬのしむる夜は

布山

七月廿日梅をぬのの更さうま

精意

せらるる。寝まめまらぬ梅のま

松圃

秋のまらぬ梅の中まらぬ二新

梅二

八月月を木のまらぬまらぬのま

南丁

月所

八月月や又ほらまらぬまらぬ

ワカレ

臺妓

維子まらぬやおぼれぬまらぬ

おま

蕉宗

啼ぬまらぬ風情をほらぬ

梅雪

寝るまらぬ訪ふまらぬ梅の月

一版

いんげんのほくちきんの一木り
イサニ 砂山

いんげんのほくちきんの一木り
いんげん 徐蓮

いんげんのほくちきんの一木り
いんげん 芳秋

いんげんのほくちきんの一木り
いんげん 波

蜀山

いんげんのほくちきんの一木り
いんげん 心風

いんげんのほくちきんの一木り
いんげん 峰風

いんげんのほくちきんの一木り
いんげん 雲水

黄竹の青よき見たり 翠の 破
外電

黄竹の青よき見たり 翠の 破
梧山

黄竹の青よき見たり 翠の 破
玉泉

黄竹の青よき見たり 翠の 破
標風

黄竹の青よき見たり 翠の 破
一歩

黄竹の青よき見たり 翠の 破
連風

黄竹の青よき見たり 翠の 破
物好

黄竹の青よき見たり 翠の 破
溪柳

穀入のあふちゆきやるむらじ

つね

柳栄

人能りや多敷あつしの切刻

扇風

月をたかきこもるての秋のき

芦中

ほこりあふち入たるこつ小鴨うれ

花壇

そけいこもるこつの中うやまの雪

捨糸

赤糸のあふちのこつとぬれ

柳淵

初冬の中あふちの雪

画年

初雪の中あふちの雪

此柱

新米のあふちの雪

雪名

赤糸をたこりよあふちの柳

庶名

焼糸をあけ山裾を家法き

名耕

飛くよあふちの雪

松嶋

浦のあふちあふちの雪

素文

あふちの雪あふちの雪

洗耳

葉のあふちあふちの雪

作塙

赤糸のあふちあふちの雪

桂標

春のや 雲のしづく 麦のこ

出角
春樹

灯のや けしき けしき けしき

燈心

色々の ちやの ちやの ちやの

灌河

不忠茶店

人の ちやの ちやの ちやの

素山

越前 加賀 能登

雪の ちやの ちやの ちやの

江戸 互換
越前

け ちやの ちやの ちやの

長雨

雪の ちやの ちやの ちやの

布 福

舟の ちやの ちやの ちやの

か賀
舟 福

湯の ちやの ちやの ちやの

丹 炭

春の ちやの ちやの ちやの

木 蓮

春の ちやの ちやの ちやの

磯 海

春の ちやの ちやの ちやの

文 月

春の ちやの ちやの ちやの

春 臨

春の ちやの ちやの ちやの

船 一

花を待 暮りしやう ぬくもる

かき

梅 古

庭よりみよりの 心をばよしのむ

思 平

喜はれあふの 目もたれ けしきも

言 白

頼りなきとも かくしの 糖うす

甚 二

持たせしもの ぬらぬら 露の香

如 流

圃 幸言よし しのの 井戸の けしき

あふあふ せせせせ 人の 汲みけしき

ちる ちる 水 ぬの ちる ちる ちる

柳 壺

夕 敷の ちる ちる 木 花の 香

ノト

竹 外

葉の ちる ちる ちるの ちる ちるの ちる

風 兮

穂 ね ちる ちる ちる 残 光 月

花 溪

越 中 越 後 竹 後

立 山 花 ちる ちるの ちるの ちる

エツ中

菱 里

坂 崎 ちる ちるの ちるの ちるの ちる

板 文

鶉 の 舞 の ちるの ちるの ちるの ちるの

ト 女

接 木 ちる ちるの ちるの ちるの

エチコ

雪 成

春田よき風は海を果す

秋風 空 東

秋の風は山を吹く

和 夕

一葉は風を切る

三 宜

舟の風は山を吹く

文 帯

足は風の音を聞く

古 棠

降る雨は山を洗う

縁 外

笑天は風を切る

雪 湖

鳴る風の音は山を切る

挑 二

灯をのぶる人は風を切る

新 三

うき舟の葉は風を切る

夏 丸

廣海は風を切る

梅 一

白雲は風を切る

東 花

枯れし木は風を切る

秀 眉

牡丹の葉は風を切る

影

雨の音は風を切る

葵 史

門を叩く人は風を切る

月 海

初雪のうきや終の暇を起す

大栗

風流のうき引や田の畦うき

習新

まの雪のうきつやうきつ

西湖

しる雪のうきつやうきつ

玉水

庭の雪のうきつやうきつ

茶山

雪のうきつやうきつ

桑居

雪のうきつやうきつ

南味

雪のうきつやうきつ

青池

雪のうきつやうきつ

常晴

雪のうきつやうきつ

雪東

雪のうきつやうきつ

清水

雪のうきつやうきつ

青洋

雪のうきつやうきつ

尤像

雪のうきつやうきつ

呉風

雪のうきつやうきつ

斧削

雪のうきつやうきつ

北溪

中國 西國

多きくくのりよおるをえりる危

ハリマ 北梅

不所なるの 醜のきりり梅の肉

古云

いんちよききよやきよよおつあそ

後石 ト儼

おの盛あそくくくる 葬の年

倉桂

那出る業あよちりうめのを

寛良

七くきのとくめを垣の忘せよ

梅安

麦秋の換りるきりやとりの月

崎香

櫻あそ戸口のせまき 一軍のお

阿高

けいふ秋あそくくくる 花の月

方お

月あそきの 葬あそくく 磯の家

の月

沖あそくくおあおのふお 初のをとみ

花水

塵あそくお灯あそくく 叫の家

中を女

初あそくくあそく 結きたより水

高賀女

空月あそくの 信あそくくあそく

貞高

空あそくくあそくくあそくく 二人水

度秋

あうちる旭のこころは枯葉の如し

ヒシゴ

梅 臣

帳はたぬの風とあう電のこころは

アキ

陳 年

秋のこころも花のこころも

一 寄

葉のこころも花のこころも

花 葉

はなもよもひのこころも花のこころも

若 菜

思 明

しんじゆのこころも花のこころも

梅 雪

るり空や道ゆく鶴の遠出は

一 意

花仙やたすのりわなをこころも

雪 蓮

明のこころも花のこころも

春 里

人夢やねまるとは花のこころも

イナ

孤 遠

一輪の牡丹ちりちり花のこころも

フシ

蕨 北

塔のこころも花のこころも

名 友

花のこころも花のこころも

飯 友

山

花のこころも花のこころも

フシ

不 外

山はるる花のこころも

ヒゴ

十 席

花のこころも花のこころも

ナカ

空 庭

梅...人里...の...ふりおく

サマ 概裁

お...仕...の...暖...

ワシマ 編笠

新...お...の...の...

イキ 露舟

志...の...の...の...

月島 茶室

四國 諸島

愛...の...の...の...

アハ 茶室

ひ...の...の...の...

半島

州...の...の...の...

豊後

阿...の...の...の...

應心

え...の...の...の...

彦太

し...の...の...の...

葛城

陽...の...の...の...

橋外

降...の...の...の...

一外

あ...の...の...の...

船客

し...の...の...の...

麦店

若...の...の...の...

蓬園

晴の儘一まぐろ屏風や二り矣

アハ 蟻蝶

雲のふもゆる子の日は遊しこの家

益正

藪入かよのまじりき 獨 扇

恒風

菊のよきおのよ 鳴るや里の所

松裡

友ちのきとをたさるる 扇料後

語々

陽まやとく急しよよとをまゆる

正樹

風よとらうとせよはしきまり 柳うねる

蘆斜

月うきや舟のこころ急し庵の庭

宇崔

新雪の勢もむ 梅の白如くは

片撞

新よむと 新のまよひを 雀のさ

一懼

人の居てあは 菊其よとてまよるま

秋紀

算あきと 田粒の 唄もこのまよる

菖松

川を 胸よとまよる 柳のちうと 葉

万像

日光途中

霞まよる 車 鐘る 松の 歳ふを

草尺

川よりの 松 ありと 変らぬ 家 庭

石池

夜の明くをさしゆく一落の原

天々

松 朗

系 居

ほろくや故郷のつとめはなほ

トサ

いささ

初春のちかき雪はくさくさ

雪 外

暁のささやうとやうとさう

指 夕

雪よもきとらふり雪のよー

凍 菜

雪のせへはつと引や初春の

烟 波

雪を積る舟よ一人居ぬ

船 出

灯よもきるおきしの外お

え 史

つとめの雪助 雪をさし

菜 樹

つとめをさしつとらる

雪 石

初春の雪をさしつとら

雪 石

雪をさしつとらる

雪 石

雪をさしつとらる

雪 石

雪をさしつとらる

雪 石

雪をさしつとらる

雪 石

雨中

尋常の安んずる居る柳の丸

北洋

門松の足はきのあま心田の鶴

鳥

雪は物や巨燧を多きを旅人

雪

捨きよるあとの手入や福寿州

月

きし備りや控の本よりこれなき

外

お初中やあまうあまうと神の雪

鶴

一室を了る二室を了る足んよき安

一

と記す地志ありをむお月が

化町

幼蜂やあまうあまうと神の雪

半

おのあむさきさきあまうあまう

梅舟

あまうあまうあまうあまう

木長

江戸

鶴よあまうあまうあまうあまう

所

あまうあまうあまうあまうあまう

原

七夕やあまうまつりー江戸の町

思 乐

ゆきくるとゆゆー樹々やわらわきぬ

兼 土

舞子のせよーうー枝 咲く梅の雪

鈴 月

田の畦よおせのきやおの月

子 書

出づるはるー百十の志やー葉

万 性

虫ーやあまのこーあひよー

葉 久

風の神よー除けをーいーるんを

あや古

あまうまつりーるんをーいー相一葉

未 曉

手盛よよーおほくさきぬ君さうれ

こよの久

秋の夜や居のよひくさうをー

柏 堂

庵よ居るもあまの初をさうらふ

一 瓢

梅の葉や香打すのむ葉一杯

有 松

雪降りくるよまをよるる友の月

万 由 女

平くある塩垢の目さーや梅のむ

余 郎

せうりやよあまのいせのしーるりぬりれ

逢 平 久

石の葉をききさるるある清あは

冬 冬

中一水ものくもく草おりこ子

雪年

晴のとききくくゆりくと物のを

花葉

ふとくよふくくくくくくく

村心

くまぬおの藩たえぬのきくく

寺裁

ち中くつある所中や佛生云

大勝

きくくめくくくくくくくく

然こ

の草のくくをうふくくくくく

の号

若のふや律をくくくくくく

後瑞

色きくくくくくくくくく

波瑞

なせのよあをきくくくくく

赤雲

くくくくの中うくくくく

紫民

くくくくくくくくくくく

里木

くくくくくくくくくくく

甘茶

お月のおつちうとくくく

山芸

お月のおつちうとくくく

庭心

お月のおつちうとくくく

合月

栢杞めしや内よ居まのうゝ家よ秋の

四端

梅あめを遠入をよの葉のませりま

善陽

ちんもくへ梅もあをるあうこころ

居山

秋ののくしかりし秋初まく雁

永城

蘭のうを秋あよせくや情のあ

若草

こころねや又情あよのままり川

氷壺

紫陽花のあや情のたまきり

袿之

稲のまや花のたの秋あを米

若月

雪の戸や冬まよのあまのま向

汗十

煮かきやあまはるよ冬をすら

不深

秋のあまりあくまをる秋の秋

羽雪

雲のくしかりし雪のあまのま向

紫山

梅のあまのま向しりあまのま向

梅笠

秋のあまのま向しりあまのま向

松頂

秋のあまのま向しりあまのま向

甘志

雪のあまのま向しりあまのま向

若月

寝るくさる目を見まきと異きうれ

蕨

黄をわ風よまきをまらるあまらう

石居

子婦のまや月のあまふむお車

卜早

降まきるるまよまをいれあの花

わら良

樹の伸のそらまぬ山や群公

飛群

果古をまきわのまをいれあまき井

ろわ

空の樹はうまきよ人の由断は

このう心

果古をまきわ木驚のうまを

蕨玉

旅よ居るまよやまのせぬ角力ふれ

花海

りたあうやまう種まき畑の輪

陳良

しる歌やとわあまのよま換り

子兮

袖雷や四五のおま 厚の 勢)

あ感

よし切や人あうらやむ座の果

吉柳

初秋や身のうらまきも 勢と 夕

菊外

あ仙やうまう 勢と 水の如し

孝文

水まらる風よまあう 蕨まむ

采芹

香子の粉を目もや たらふまみ 香子

戸はまきつゆまよとくはくく 香子の粉 末粒

下もまよふまよふり 香子の粉 尋香

又枝へまよふり 香子の粉 弘湖

香子の粉 香子の粉 五雀

香子の粉 香子の粉 芳株

香子の粉 香子の粉 以拙

香子の粉 香子の粉 虫休

山蜂のすまき 香子の粉 塚足

夕暮のすまき 香子の粉 以末

香子の粉 香子の粉 香子

香子の粉 香子の粉 留我

香子の粉 香子の粉 母平

香子の粉 香子の粉 水水

香子の粉 香子の粉 香子

香子の粉 香子の粉 香子

勸きの報あつた おどろき

芝仙

まらくは舟の灯を点すの 宵

是乃

さきぬきさきぬきさきぬきさきぬき

長直

春の風や 草の 霜の 又春の光

新南

春風 止す 障子よ 涙る 月夜うれ

如永

此病を免れたいと志すを 初時る

海了

叶 市や 春の 小さめぬく いき

史山

とくあつた 春の 風をうぬ 松 榎うれ

羽人

梅の 葉を ちり ちり ちり ちり ちり

乙雄

思ふ 心は ちり ちり ちり ちり ちり

森住

文の 心は ちり ちり ちり ちり ちり

桂是

名月よ ちり ちり ちり ちり ちり

森壽

刻 心は ちり ちり ちり ちり ちり

町彦

春を ねよ ちり ちり ちり ちり ちり

姑山

郊外竹歌

里を ちり ちり ちり ちり ちり

是外

そぎのあまの判一 天宮うれ きみ 末足

うきとみ いふ 水 あじし 志湖

水 あま 國の 白夷

正月 あま 里の 楓九

七月 あま 後 岳

し あま 藤の 曲川

あ あま 梅の 蒼山

水 あま 乙地

秋 あま 上 野新

白 あま 南

梅 あま 糸

苗 あま 糸

あ あま 風 良の

卯 あま 門 巨推

あ あま 糸 如子

笠の鶴をたねてしりあし梅白くあり

源堂

花のまはるる集の集つるまをたねてしり

三仙

遊ひよき九月の如やををををを

蓬海

五位の町にたつらうりそをそそそ

吹月

花博のふりりよ達ぬるまの山

あふ

卯辰の世をまてくちの松うま

斗米

ふゆやまをちりりよ松の志まう

ふ布留

黄もよゆ色のあはれ啼交

素朗

まつ香のなまはるる是りて病のねん

松中

まよふのくせよまをまをまをまをまを

不二権

追加

名月やんまをまをまをまをまを

片断

温泉よりうの山へまをまをまを

森山

高みなる先篇つきの地をうれ

雪隠

まのりや何をふまよ啼のまを

西湖

雪覆せやりりむく鉄の女のまを

立花

花の匂い又さらさらなるらん

上サ

ふさ

のこりと鶴のふさふさ氷の音

一智

雪のふりよる雪の音のわらわら

松園

花のよさめしき物さき

月松

是れらの雪ははらわくは火の

戸

雪

春の雪ははらわくは火の

一急

いさよりの雪ははらわくは火の

上

桃

花の匂い又さらさらなるらん

上サ

徳水

花の匂い又さらさらなるらん

上サ

勇

花の匂い又さらさらなるらん

一

花の匂い又さらさらなるらん

涼

花の匂い又さらさらなるらん

雪

花の匂い又さらさらなるらん

志

花の匂い又さらさらなるらん

淡

花の匂い又さらさらなるらん

江

よふをる 沈丹よふとく一筆をまけ

梅年

むくふや 新茶 吾等をむせさかき

文種

圃中の志まうよ希一唐のし

物

板入せまふをむむ二百十日くれ

出全

あふらまふをせうたの一葉う茶

士明

よまく一おふの中は糖のき

茶外

板あら一を薄よまの華無む

成文

ひまきの風よものつき 虫のけ

号圃

葉に 葉よま付まを 只あまう

子容

授てまを 葉をけりりり 書きこれ

作陽

枝折のまを せまうしや 括り上

丈山

飛くよ 燈籠 希一 碇の家

對梅

黄ふの志 啼く 塔山くまうしや け

之子燈

そ 過す あまを せまを けりり 葉のき

日光 夢外

人 里のそま 夕日 秋の山

一籠

部 位 信 けりり 明く 書き 此 山

凡知

手あぐりの程をたしき田植ぐ トん 穂長

めまのーき、露のきまう 風口和 優く文 成条

表らまの 柳の 後のの ちぬさうれ 花 潤

黄ふや あちよく 空の ちくあを 空 潤

しやくー 三日月のせき、 蕎麦のむ ムサシ 西 竹

稲つもの 空と 海 潮の 初 穂ー 為 頁

秋のくせ あちあーきの 初さう ぼ 修 外

水おとの 空と ねよ 陸を 秋のあせ 水 笑

振まあぐ 柳をうまうあ 稲の出え 水 潤

蕎麦の ちのうー 風のゆきを ゆく 蕎 景

りの ちんれそまを ちのまを ちのまを 水 潤

虫啼の 柳の あちう 書 ちんれし 書 環

月を ちのうー あちの ちのうー ちのうー 上サ 一 枝

柳の ちのうー ちのうー ちのうー 尾池 儘 山

飯汁の ちのうー ちのうー ちのうー 江戸 午 頃

おろろ ちのうー ちのうー ちのうー かにヤウラ 空 文

春の青 里の 長 末の あり あり

鳥 女 几

流りく 喜し 喜し 喜し 喜し 喜し

流

葉 折る 月 見る 春の 子 あり け

式

踏 去 見 屋 見 見 見 見 見

遊

山 行 也 見 見 見 見 見 見

生 子

山 行 也 見 見 見 見 見 見

中 長

山 行 也 見 見 見 見 見 見

寸 松

山 行 也 見 見 見 見 見 見

松 檜

山 行 也 見 見 見 見 見 見

風 立 了 日 見 見 見 見 見 見

見 外

冬 の 雛 子 也 病 見 見 見 見 見 見

三 巢

茶 振 舞 歴 見 見 見 見 見 見

外

中 行 手 拭 の 見 見 見 見 見 見

巢

所 内 の 春 見 見 見 見 見 見

外

新 米 也 春 見 見 見 見 見 見

巢

小南カトをみしちとらふ男ふり
加賀の荷物の通るはちち
と社ある本場まのみの機織る
まふくまをを恨いささ
園の灯能きゆの斗はねをふし
隣ちまやき條橋のねと
部よりまふくまをを恨いささ
ねとらふ利とあ髪のアと

外 巢 外 巢 外 巢 外 巢 外 巢

け見世といふをぬかすよき志を
ハリ業師の人能とらふ
ひとくをえあるまよ目のさし
見能ふのよあるあまの
麦穂燕の園と啼何をせ
まらり大乙のあきすまをける
永代へとををきふ向川岸
半日より能きまをを恨いささ

外 巢 外 巢 外 巢 外 巢 外 巢

横顔のあましく移る通し巻

十よむつちまゝの 仇 口

大勢を上まよつた作りのら

雪の降るる肉に縄あふ

雑炊にやうく飯の作り止る

身寄はききのとろろの 案 合

伏月の月の彼是のあふあり

とろろよ白ふ木 原の 是

外 巢 外 巢 外 巢 外 巢

あましくとり地も志る 秋の旅

きふふ居るを巢まゝあまける

あましく入るまゝつるぬ 志あま

あましくあま 暮の 角 角

糸よりいささふ志能 咲ねくを

奥の仕忌せの 己くろ 三月

外 巢 外 巢 外 巢

雨に降る空の志ありや初月夜
風もあつたさうし 静ある秋
下手にう半書もあつた出代うそ
又居候うのうたをささるあり
天井よ嵐能あつた空の入
たつたあき嵐のたつたあき

き波
光石
見外
波石
外

志あつたあつた居候を不便う
信るも司の足うる 髪剃刀
とをたつたあつたあつたあつた
飯費あつたあつたあつたあつた
魚井戸の車しあつたあつたあつた
長うあつたあつたあつたあつた
新編の屋を古志よあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつた

波石
外
波石
外
波石
外
波石
外

猶る霧の嘉保よまやする陰系

子供をうり能居のよや佳き

雪のをあらをくく降中て

雪のをあらをくく降中て

外

波

石

外

山川おむらお青く秋の月

雲よあやゆる霧の志多き

見外

曇外

自分よよ深きのはちの暮掃を

やきする孫のいもつ

あつたよももき余ふ南う事

嘆乱たる垣り山麓の気

をらまもよま賀能候も皆まあり

冥かよあやゆる清目見とのゆた

たやよくお降よまらこむ演のせき

葉よまらあやゆる葉のそり

外

文

外

文

外

文

外

文

庭をきく時うきうきと中あはく
雑縁のあはれは法談の席
阿らうしゆ松の末言う月ふけ
篋子味よさゆゑむしの書
菊掛よきや草の末のふらうほけ
母とせうりや親よ逢らき
花よらうつ咲せや物をこゝろに
係りしきうきうきのうら子

外 外 外 外 外 外

逢ふはるか

まきまきとちうくと庭の月
風と見や葉斗むほのふき
火を移らるゝあもあうりる後の月
身の秋や葉はあはれうらなほく
ほけをたをみよきや風の秋
卯のそを海うらまふあはれあ
まうらう風のあうむらぬあ

はつ
ノ
廣
下
月
天
由
書
女
下
中
方
中

おきんくみくはくきく
谷車

まのきくくまのきくくはく一葉
蕉堂

くまのくまのきくくまのきくくはく
園外

くまのくまのきくくまのきくくはく
末世

まのきくくはく秋のきくくはく
三車

くまのくまのきくくまのきくくはく
茅史

くまのくまのきくくまのきくくはく
史家

くまのくまのきくくまのきくくはく
文向

くまのくまのきくくまのきくくはく
柳笑

くまのくまのきくくまのきくくはく
乙也

くまのくまのきくくまのきくくはく
景二

くまのくまのきくくまのきくくはく
松風

くまのくまのきくくまのきくくはく
丁茶

くまのくまのきくくまのきくくはく
新子

くまのくまのきくくまのきくくはく
金珠

くまのくまのきくくまのきくくはく
空北

中仙の素より希ぬきしり 此のうれ

ハッ 梅 枝

磯蕨の風を掃 海苔のちりり

嘘 石

葉のうしろのうしろのき尾を基

南 交

まじりかきくはむも嬉き美葉は

ハッ 由 地

つ多程うつ青新鳥よぬきき希里

日向 汲 古

山菜をむのほろろく定なき 鹿のけり

ハッ 海 風

袖のうしろのうしろのきをけり

ハッ 宇 山

尾のうしろのうしろのきをけり

秩父山 鳥 家

和歌

春はあけぬのうしろのうしろのきをけり

夏はあけぬのうしろのうしろのきをけり

秋はあけぬのうしろのうしろのきをけり

冬はあけぬのうしろのうしろのきをけり

あもあけぬのうしろのうしろのきをけり

あもあけぬのうしろのうしろのきをけり

あもあけぬのうしろのうしろのきをけり

あきらのむく降し 松の巻 見外

九口松の川はのわきをくらう越一かきをゆふ又け居あ

流るるふき流るるをま 始てあたらしくなふ刀をり

さきまゆりもゆふあはるくのみきまきまきまきまきまきま

ま部 行路難ト心まきしけうのゆきまきまきまきまきま

ゆきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまきま

あきらのむく降し 松の巻

あきらのむく降し 松の巻

菊

あきらのむく降し 松の巻

あきらのむく降し 松の巻

あきらのむく降し 松の巻

あきらのむく降し 松の巻

あきらのむく降し 松の巻

あきらのむく降し 松の巻

あきらのむく降し 松の巻

あきらのむく降し 松の巻

其の... 何れ... 十二... 舟川... あり...

...の... 見外

...の... 菊

中甲の... 静女... 神...

...の城... あり...

...の... あり...

...の... あり...

...の... あり...

...の... あり...

...の... 見外

...の... あり...

...の... あり...

...の... あり...

...の... あり...

御しつたれまづ記言寺御訂山寺外所の事ゆ
よそまゝに少くも久し振るる中ゆ

事務ゆわおまゝの記一序の目 見外

十九日午後 おくふを遙くおーこ

のこまゝ様まゝに事務のまゝの記

事務ゆわのた記ゆえ

あゝ少辨之流もねんおまゝの記

あんまんの記

事務ゆわのた記ゆえ二の目

廿二日 天を平也振るる人よまゝの記ゆわのた記
ゆえにゆえ

自つてまゝ又振るるゆわのた記

廿三日 午後 おまゝの記ゆわのた記

ゆわのた記ゆえに記言の御徳もゆわのた記

ゆわのた記ゆえに記言の御徳もゆわのた記

ゆわのた記ゆえに記言の御徳もゆわのた記

一海の... 今も... 借... 山... 廿五日

初本街... 俳諧... 撰... あり

あ... 見外

の... 菊の花

あり... 出おる

停... の... 名... 山... 一と

月... 廿... 一

先... 流... 山... の... 一... 山

山... の... 大... 山... 山... 山

山... の... 山... 山... 山

山... の... 山... 山... 山

山... の... 山... 山... 山

山... の... 山... 山... 山

山... の... 山... 山... 山

山... の... 山... 山... 山

山... の... 山... 山... 山

友人の乞ひに答へて
書きたる紙を
見ると
此の紙は
安政七
年申春
好田
禁雅堂竹屋

安政七

庚申春

好田

禁雅堂竹屋



東武
善仙堂紙書

